慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	W. Kalweit著 現代資本主義における物価騰貴の諸原因について
Sub Title	Werner Kalweit: Über die Ursachen der Preissteigerungen im modernen Kapitalismus
Author	北原, 勇
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.11 (1958. 11) ,p.1007(71)- 1014(78)
JaLC DOI	10.14991/001.19581101-0071
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19581101-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

言論活動はにわかに活潑となった。すなわち大正五年、「憲政の本義 を説いてその有終の美を済すの道を論ず」という有名な論文を発表 年にはロシヤ革命やシベリア出兵について独特の論理を展開し、 れた時、第一次世界大戦が勃発したが、この時期から彼の対外的な 本のデモクラシー運動の先頭に立ったのである。 な勝利をおさめた。想えば、この第一次大戦後から大正十二年関東 物情騒然たる有様であった。このようなデモクラシーの思潮のもり 方、ロシア革命の影響や戦後の物価の島騰により、 建主義および軍国主義に真向から反対した。当時はドイツの敗戦の た。そしてまさにこの時代に彼は、その民本主義をひっさげて、 大震災までの時期は、日本のデモクラシーにとって黄金時代であっ 上るなかに、吉野は右翼団体、浪人会の立会演説会において圧倒的 日本にもデモクラシーの思想が滔々として流入する一 中央公論によっていわゆる民本主義をとなえ、 米騒動がおこり、 大正七 日

> とをおそれなかったのである。 とをおそれなかったのである。

見えたであろう。ブルジョア・デモクラットであった彼には、ファシズ 主義との闘いであり、ブルジョア民主主義者としての苦悶の姿とも 退いて東大法学部講師となった。それ以後昭和八年、肺結核で湘南 おいて、清浦内閣を批判したものを出版したため筆禍にあい、朝日を 学研究会の学生検挙事件などの場合 紊乱とかあるいは治安妨害を理由にして、学問研究の自由が奪われ 運命について、真険に考えたのであった。とりわけ、 の地に歿するまでの彼の晩年は、ファシズムと封建主義そして共産 入社したが、はからずもその年の二月関西で行われた時局講演会に いかなる方法をもってしてもこれを許すべからずとした彼も朝憲 イデオロギーの間にあって、吉野は、日本におけるデモクラシーの ト運動とコミンテルンの指導のもとに活動を開始した日本共産党の ムと共産主義との本質的な相違を区別できなかったのではないか。 彼はその後大正十三年、東京帝国大学教授を辞任し、朝日新聞に 大正の終りから昭和のはじめにかけて昂まる北一輝らのファシス たとえば森戸事件や京都大学および同志社大学における社会科 官憲の横暴が目にあまるも 国体の変革は

背後から成長してきたプロレタリア・農民が進出してき、その前後 ジョア地主の進展をはばむ落閥、軍閥、官僚閥とたたかうことによ の敵にはさまれたのが、昭和初頭の吉野の立場であったといえる」 のためにはばまれ、明治文化研究というさらに底深い研究によっ ていることなどは日本的デモクラットとしての彼の矛盾を露呈して 産主義的独裁とを同一視し、体制としてのこれらの独裁政治にたい 本主義は、階級への認識が稀薄であるため、ファシズム的独裁と共 告したのであった。著者も明らかに指摘されているように、 とをおそれなかった。また共産主義インターナショナルの学生にた と結論づけておられる。 ムッソリーニとレーニンにたいして礼讃もしくはその役割を重視し してはきびしい批判の態度をもってのぞみながら、指導者である のとなったとき、彼は治安維持法そのものに、批判の刃を加えるこ いる。これについて著者は、「要するに、 民本主義者吉野は、ブル いする影響を憂慮し、そのデモクラシーとの矛盾について学生に警 第二の進出を計劃している間に、すでにそのブルジョア地主の 日本的民主主義の一角を昂揚しようとつとめている間に、敵 彼の民

るとしても、いささか事実の羅列的傾向を感ずること。台吉野作造ば、台豊富な資料を通じて実証的に叙述された努力は、敬服に値すである。ただ筆者の感じたところを卒直にのべさせていただくなら意図されるところを把握できなかったのではないかとおそれるもの以上は、本書のまったく表面的な紹介にすぎず、筆者は、著者の

W. Kalweit 著

諸原因について』『現代資本主義における物価騰貴の

(Werner Kalweit: Über die Ursachen der Preissteigerungen im modernen Kapitalismus, 1958, Berlin, S. 140.)

著者 W. Kalweit は東ドイツの経済学者である。本書はマルク

ス経済学の立場から、現代資本主義における全般的な物価騰貴の原ス経済学の立場から、現代資本主義における全般的な物価騰貴のと、最近多くの人の注目をひいている問題は少ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は少ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は少ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は少ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は必ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は必ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は必ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は必ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は少ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は少ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は少ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は少ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている問題は少ない。労組、消費はど、最近多くの人の注目をひいている。著者によれば、全般的物価騰貴の原めに、現代資本主義における全般的な物価騰貴の原めに、「現代資本主義における物価騰貴は、あれやこれやの経済行め、独占資本のではなくて、資本主義的社会秩序の根本条件からおこり、独占資本のではなくて、資本主義における全般的な物価騰貴の原とを明らいた。

め、第二篇を主として紹介することにしたい。
における価値・価格論の要約にすぎず、本書の主題はむしろ第二篇における価値・価格論の要約にすぎず、本書の主題はむしろ第二篇における価値・価格論の要約にすぎず、本書の主題はむしろ第二篇にあるものと思われる。それゆえ、第一篇はマルクスの「資本論」さて、本書は二篇よりなっている。第一篇『マルクス価格論の概さて、本書は二篇よりなっている。第一篇『マルクス価格論の概

第一篇『マルクス価格論の概要』はさらに八節にわかれている。

本学である」(マルクス)ことが示されている。 本学である」(マルクス)にとが示されている。 一『マルクス価格論の概念規定のために』では、まず価格が商品 と述べている。二『価値は価格理解の基礎である』で の前に、なぜ商品は総じて交換されるのかという問題に答えねばな の前に、なぜ商品は総じて交換されるのかという問題に答えねばな の前に、なぜ商品は総じて交換されるのかという問題に答えねばな の前に、なぜ商品は総じて交換されるのかという問題に答えねばな の前に、なぜ商品は総じて交換されるのかという問題に答えねばな の前に、なぜ商品は総じて交換されるのかという問題に答えねばな の前に、なぜ商品は総じて交換されるのかという問題に答えねばな の前に、なぜ商品は総じて交換されるのかという問題に答えねばな の前に、なず価格論の概念規定のために』では、まず価格が商品 本質をひきだすことに科学 の前に、なず価格論の概念規定のために』では、まず価格が商品

その後、四『交換過程、及び価値通りの交換のための諸条件』として、①種々の商品の交換が偶然的・または臨時的なものではなくして、①種々の商品の交換が偶然的・または臨時的なものではなくなること。②商品がほぼ相互的欲望に照応する比率的分量で生産さなること。②何らの自然的・経済的独占も購買販売を害さないこと。を簡単に指摘し、五『価値と価格の不一致』では、価値と価格と。を簡単に指摘し、五『価値と価格の不一致』では、価値と価格と。を簡単に指摘し、五『価値と価格の不一致』では、価値と価格と。を簡単に指摘し、五『価値と価格の不一致』では、価値と価格と。を簡単に指摘し、五『価値と価格の不一致』では、価値と価格と。を簡単に指摘し、五『価値と価格の不一致』では、価値と価格の不一致の可能性が「価値形態そのもののうちに横たわっている」の不加度に関係では、個格を動物のでは、個格を動物のでは、個格を動物のでは、個格を動物のでは、個格を動揺、(3)価格の度量基準の変化、(4)価格統制法などの経済外に、(3)価値又は貨幣価値の変化、(2)無政府的生産を基礎とする需給のたること。(3)価格を動詞のでは、(4)価格統制法などの経済外に、(5)を対して、(4)価格統制法などの経済外に、(5)を対して、(5)を対して、(4)価格統制法などの経済外に、(5)を対して、(5)を対して、(5)を対して、(5)を対して、(5)を対して、(5)を対して、(5)を対して、(5)を対して、(5)を対して、(5)を対して、(5)を対して、(6)を対し、6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対し、6)を対し、6)を対して、(6)を対して、(6)を対して、(6)を対し、6)を対し、6)を対して、(6)を対し、6)を対しまするは、6)を対し、6)を対

動揺することを示している。 また七『資本主義における価値法則の普遍的性格』は、資本主義 においてすべての生産物、さらには価値をもたないものまでが商品 とりあげ、八『資本主義の 独占以前の 段階に おける 価格メカニズとりあげ、八『資本主義の 独占以前の 段階に おける 価格メカニズとりあげ、八『資本主義の 独占以前の 段階に おける 価格メカニズとりあげ、八『資本主義の 独占以前の 段階に おける 価格メカニズとりあげ、八『資本主義の独占以前の 段階に おける 価格メカニズ とりあげ、八『資本主義の本主義的生産様式の下での価値法則にからする。

ける物価の趨勢(Preisentwicklung)』は六節からなる。析した第二篇にあると思われる。第二篇『資本主義の独占段階にお約したものにすぎず、本書の主題は、現段階における物価騰貴を分以上の第一篇は「資本論」第一部第一章、及び第三部第十章を要以上の第一篇は「資本論」第一部第一章、及び第三部第十章を要

していた物価水準が、前世紀末から今世紀を通じて、ずっと上昇傾国の統計によって、前世紀末まで生産力の向上の結果低落傾向を示まず、九『物価趨勢の歴史的傾向』は、ドイツ及びアメリカ合衆

で、これらの諸要因を順次に説明していく。 ち。十『資本主義における物価騰貴の経済的基礎』では、資本主義 と一般的物価騰貴が帝国主義の本質、その矛盾、その政治的経済的危 と直接結びついていることを強調する。すなわち、独占資本の支 と直接結びついていることを強調する。すなわち、独占資本の支 と直接結びついていることを強調する。すなわち、独占資本の支 の強化やインフレこそが物価騰貴の原因であるとのべ、以下各節 で、これらの諸要因を順次に説明していく。

でやや詳しく論ずることにする。) (この内容については後的物価騰貴を惹起するかに論及している。(この内容については後格と価値との関係を論じ、最後に、独占価格はいかなる仕方で全般格と価値との関係を論じ、最後に、独占価格はいかなる仕方で全般十一『物価趨勢に対する独占価格の影響』!…ここで著者は独占

本拡張する必要上と、帝国主義諸国間の矛盾の激化に伴い軍事支出とる政策はさまざまな仕方で物価騰貴をもたらす。その主なもの発注、さらには税制である。資本主義が帝国主義段階に入ると、の発注、さらには税制である。資本主義が帝国主義段階に入ると、帝国主義各国では、税総額の増大傾向が非常に強まる。それは、階帯国主義各国では、税総額の増大傾向が非常に強まる。それは、階市国主義各国では、税総額の増大傾向が非常に強まる。それは、階市国主義各国では、税総額の増大傾向が非常に強まる。それは、階市国主義各国では、税総額の増大傾向が非常に強まる。それは、階市国主義各国では、税総額の対する帝国主義国家の影響』――国家独市工作の場合には、市政・大学の政策を表現した。

評及び紹介

を増大するためである。ところで、この税総額の増大は物価といかなを増大するためである。ところで、この税総額の増大は物価といかなる関係をもつであろうか。ここで著者は、F. Rzenitzek が商品課品の生産縮小という経路をたどって、これらの商品に対する課税は、おの生産縮小という経路をたどって、これらの商品に対する課税は、のために支出されることこそが、全般的な物価騰貴の原因である。著者によれば、経済軍事化のもとで税収入の大部分が軍事目的る。著者によれば、経済軍事化のもとで税収入の大部分が軍事目的る。著者によれば、経済軍事化のもとで税収入の大部分が軍事目的のために支出されることこそが、全般的な物価騰貴の原因である。ところで、この税総額の増大は物価といかなを増大するためである。ところで、この税総額の増大は物価といかなを増大するためである。ところで、この税総額の増大は物価といかなるのために支出されることころで、この税総額の増大は物価といかなを増大するためである。ところで、この税総額の増大は物価といかなるのであって、全般的な物価といかない。

る。著者は I. A. Trachtenberg や E. Bregel のインフレ論をある。著者は I. A. Trachtenberg や E. Bregel のインフレ論をある。著者は I. A. Trachtenberg や E. Bregel のインフレ論をある。著者は I. A. Trachtenberg や E. Bregel のインフレ論との影響』――物価水準の趨勢に及ぼす貨幣本位崩壊と為替相場攪乱として物価騰貴に決定的な重要性をもつのはインフレの問題である。そのの影響』――物価水準の趨勢に及ぼす貨幣本位崩壊と為替相場攪乱十三『平均物価水準の趨勢に及ぼす貨幣本位崩壊と為替相場攪乱

弱い資本は不利となる。 ば高い独占価格も国家の関与、インフレ、国家発注、税制度等があ されねばならないが、実際には相互に結びあって作用する。たとえ 与える。又、資本家階級内部でも、物価騰貴の不均等によって力の 環理論」を批判し、物価騰貴は賃金が労働力の価値以下へ低下する 労働者階級に対するものである。著者は、物価騰貴が賃金上昇に先 社会的諸結果を論ずる。この社会的諸結果のうち最も重要なものは 価騰貴が世界的な現象になる必然性にふれ、最後に物価騰貴による に説明された諸原因が一応総括される。これら諸要因は厳密に区別 不均等発展を激化し、社会的再生産を困難にする。 なく、中産階級とくに農民に対してシェーレを通じて大きな打撃を 本質的契機の一つだと主張する。物価騰貴は労働者階級ばかりで 行することを統計的に実証しながら、いわゆる「賃金と物価の悪循 ってはじめて長期的に維持されるのである。 十四『物価騰貴の総過程とその社会的諸結果』 なお物価騰貴は資本主義の基本矛盾である このあとで著者は、物 -ここで前節迄

長力を示すものである」と述べて、この著作を結んでいる。的社会秩序の界進的崩壊と、他面における新社会秩序の生命力、成物価の低下傾向を対比させて「この対照は一面におけるブルジョワ最後に著者は資本主義諸国の物価騰貴と、社会主義社会における

×

学の不十分さをほとんど自覚していないことによるものであろう。 図も理解できる。しかしながら、読み終って全体的にものたりなさ の資本主義の本質と結びつけて統一的に把握しようとする著者の意 で発展させようとする視角の欠如にあらわれている。 このことはまず、マルクスの価格論を現段階の価格運動の分析にま されない。これは著者がこれらの問題における従来のマルクス経済 ぎないのであって、 来明らかとされているごく原則的なことを簡単にまとめたものにす かれている。しかし内容的には、それはマルクス経済学において従 の概要についても、 と言わざるを得ない。たしかに本書においては、マルクスの価格論 ものと思われるが、それにしては全く理論的なつっこみがたりない を感じるのはなぜであろうか。本書は専門的研究書として書かれ 物価騰貴の諸原因を一応網羅しているし、これらの諸原因を現段階 さて、以上でこの著作の内容をごく大づかみに紹介した。本書は 物価騰貴の諸原因についても、相当の紙数がさ 従来の研究の水準を越える見解はほとんど見出

れは、「資本論」第一部第一章及び 第三部第十章を 典拠にした価値著者はこの著作の第一篇でマルクス価格論を概括しているが、そ

では、ひいては後半の分析の不十分さをもたらす大きな原因ともなったのであろう。

「他格運動についての理論との間にギャップがありすぎるように思われる。マルクスにおいては、価格変動の現実的過程の体系的分析は現行「資本論」においては、価格変動の現実的過程の体系的分析は現がる。この意味でマルクスが「資本論」以外で予定していた「競争」のである。この意味でマルクスが「資本論」以外で予定していた「競争」をく認識しなかったことが著者の「マルクス価格論を整備することは、現段階の価格運動分析のためた。この意味でマルクスが「資本論」以外で予定していた「競争」をく認識しなかったことが著者の「マルクス価格論」を貧弱なもの全く認識しなかったことが著者の「マルクス価格論」を貧弱なものとし、ひいては後半の分析の不十分さをもたらす大きな原因ともなったのであろう。

としては全く正しいものといえよう。それゆえ、独占価格にかんすまわめて重要な意味をもっているのであって、著者が物価騰貴の諸原因のうち、独占価格の分析は格にかんする分析を、これを扱った第十一節を中心に考察したい。格にかんする分析を、これを扱った第十一節を中心に考察したい。の著作の後半、第二篇については言うべきことがきわめて多い

骨評及び紹介

に大いに役立つであろう。る分析を検討・批判することは、この著作の特徴や限界をみるうえ

独占利潤の源泉のとらえ方をあやまり、独占価格をたんに資本家間 常に異なった、全く新しいカテゴリーだということである。著者は 牲による独占資本の暴力的致富の一形態である。かかる意味におい る。」(S. 76)「内容的には、独占価格は全労働者・非独占資本家の犠 場価格の生産価格からの乖離としては把えられないことを示してい は「現代資本主義の経済的カテゴリーとしての独占価格が決して市 批判して、独占利潤の源泉が(1労働者階級の搾取強化、(2)非独占資 ソヴェトの L. Menderson や東独の H. Paragenings の主張を わち「独占価格は常に生産価格を上まわる市場価格である」という 者は独占価格の本質を市場価格として把える見解を批判する。すな の利潤分配の問題にしてしまったことを批判する。さらにまた、著 を独占資本主義の本質から説明しなかったこと、したがってまた、 まず R. Hilferding が右の区別を認識しなかったため、独占価格 てそれは現代資本主義の経済的基本法則の一形態である。」(Si 全住民の収奪であるという。そしてこのような独占的致富の諸源泉 第十一節で著者がまず強調するのは、現段階の独占価格が、 スの述べた独占以前の段階における「可能的な独占価格」とは非 3小生産者の生産物の一部、 さらには植民地従属国の マル

そして著者は、これらの諸源泉が加わるため、独占価格は価値法

即の枠内では把えられない要素をもってはいるが、「独占価格の形成は価値によって規定され」、「価値法則は全体として現代でも商品版は価値によって規定され」、「価値法則は全体として現代でも商品成は価値によって規定され」、「価値法則は全体として現代でも商品成は価値によって規定され」、「価値法則は全体として現代でも商品が、「独方では把えられない要素をもってはいるが、「独占価格の形がんする叙述はきわめて抽象的で曖昧である。

「連鎖反応」の展開は全く不十分なものに終ってしまっている。 と思われるのではあるが、わずか二頁で簡単にふれられているにする諸要因が ほとんど 理論的に 分析されて いないため、この騰貴の連鎖反応」を中心にとり扱っているが、ここでも分析は全く不充分である。この問題は著作の主題からみてもっとも重要なもの勝貴の連鎖反応」を中心にとり扱っているが、ここでも分析は全く不力のであるが、 おばいのが、 とれられているにするが、 という問題を「原料独占から生ずる価格的物価騰貴を惹起するのかという問題を「原料独占から生ずる価格的物価騰貴を惹起するのかという問題を「原料独占から生ずる価格的物価騰貴を惹起するのかという問題を「原料独占がなる仕方で全般と関反応」の展開は全く不力なものに終ってしまっている。

は「さまざまな分野の大資本の異なる影響のために、独占資本とH. Paragenings の見解を批判しているところには、従来の公式的図式化を排そうとする面もうかがわれる。すなわち、 Para-式的図式化を排そうとする面もうかがわれる。すなわち、 Para-では、 企業の公司を表現のでは、 でまることによって、独占と非独占領域での 平均利潤率の成立を主張することによって、 を表しているところには、 で来の公司には、 で来の公司には、 で来の公司によって、 をおいるとは、 でまるとも、 著者が現段階における平均利潤率の法則について、

(S. 74)と述べている。 ・野な古の限界は明確にはひきえないのであって、独占資本・一般資本との限界は明確にはひきえないのであって、独占資本・の限界は明確にはひきえないのであって、独占資本・

である。 の諸様相が充分に把握されることによってはじめて展開されうるの っている。しかし、それは現段階における独占と競争のからみ合い 物価騰貴の連鎖反応がおこるかという分析がなおざりにされてしま げても、独占価格がいかにして決定され、独占価格によっていかに ことのみに重点がおかれて、いかにして最大限利潤が獲得されるかリン論文以来、最大限利潤が論じられる場合、その源泉を列挙する 余地がないものとされているようである。) たしかに 独占段階に お (最大限利潤という範疇自体について、日本では 最近論議 されはじ という分析はきわめて粗雑になっていたと言えるのではなかろう ける利潤の源泉を明らかにすることは重要である。 めているが、東ドイツでは今なお、最大限利潤の法則は金く疑問の とは、その中心が最大限利潤の 源泉論に あると いうことで ある。 さて以上、著者の独占価格論の展開をみて、まず第一に気づくこ この著作もその例にもれない。したがって、独占価格をとりあ トラストなどの独占諸形態が独占価格決定においてもつ意義 それゆえ、独占価格の分析にあたっては、紳士協定、カル しかし、 スター

> きをもっているのも当然である。 きをもっているのも当然である。

発することなしに、 るのではなかろうか。すなわちそれは、現状の徹底的な分析から出 思われる。 っと制度的な面が説明されればもう少し説得的なものになりえたと のあるゆる個所でみられる。たとえばインフレの問題にしても、も いる。ところで、こうした具体性の欠如は独占価格論にかぎらず他 の価格決定に実際上、大きく影響するのだということが見逃されて 意識されるばかりでなく、これらの諸費用や賃金の増大が独占資本 論を批判しているが、これらを独占価格と関連させて論じようとは 接転嫁されるという見解を批判し、十四節では物価と賃金の悪循環 もあらわれている。すなわち、著者は十二節で租税が商品価格へ直 「最大限利潤」の命題を簡単に結びつけるという安易な方法のうち しない。それ故、税・利子・宣伝費等が資本家にとって費用として 右のごとき独占価格の決定にかんする分析の不十分さは次の点に しかし、 こうした欠陥はもっと深いところに根ざして 物価騰貴という現象と、「全般的危機」乃至は

書

評

及

紹

にあるのではなかろうか。

著者がマルクス価格論の安易な要約にとどまり、その発展・拡充へ 得するであろう。このような分析視角の欠如は、先にのべたように、 産力の発展と生産関係との矛盾の発現形態・現段階の産業循環を明 乱し不均衡を一層激化する(S. 137)などという単純な形でではな おいて把えねばならない。すなわち、物価騰貴は社会的再生産を攪 態・産業循環とを全く 切りはなす ことは 不可能で ある。したがっ る視角が全くないという点にも現われている。著者は何ヵ所かで、 の課題意識をもっていなかったことと密接に結びついているといえ らかにするこころみの中で位置づけられてはじめて充分な意義を獲 ないかと思われる。又、最大限利潤の源泉論」も現段階における生 範囲外であるとしている。 本書は長期的傾向を問題にするのであって循環の問題はこの著作の **業循環の様相は独占価格にどう影響するか、という独占価格と産業** て、長期的傾向が主題だとしても、それは常に産業循環との関連に **循環の内的相互関連を明らかにしておく必要がある。インフレの問** く、独占価格が現段階の産業循環のあり方をどう規定し、又逆に産 このような安易な方法は、独占価格と資本蓄積との関連を分析す 産業循環との関連においてこそ、よりよく把えられるのでは しかし、 長期傾向と 資本蓄積の 運動形

の問題点を指摘した。最後に一言したいのは、これらの諸問題が以上 Kalweit の近著を紹介し、その独占価格論を中心に 若干

Walweit のみの問題ではないということである。それらは戦後――とくにスターリンの「最大限利潤の法則」の命題以後、マルクス経やくにして、こうした傾向に対する反省があらわれはじめてきてい済学者の多くが、多かれ少なかれもっていた欠陥である。最近ようとにスターリンの「最大限利潤の法則」の命題以後、マルクス経路はweit のみの問題ではないということである。それらは戦後――

(北原 勇

生成』(有斐閣)によせて飯田鼎著、『 イギリス労働運動の

の時代と名ずけられる所以である。を指して、しばしば、「新産業革命」、あるいは「第二の産業革命」新たな技術革新の進展には、まことに目ざましいものがある。現代新しさを失いつつあるが、ともかく、第二次世界戦争を契機とする「オートメイション」という言葉も、今日では、そのひびきの耳

ところで、「産業革命」という用語をこのように 拡張して 使用す

しかし、「イギリス産業革命の実相はなおひとつの巨いなる謎であろうか」という五島茂教授の言葉のように、産業革命の社会史には、いまなお、神秘のヴェイルに包まれて、理論的研究による照明ながる労働者階級の第三化の問題をめぐって、ハモンド派とクラパム派との見解が対立し、いまだに一致を見るにいたらないことは、本行る労働者階級の第三化の問題をめぐって、ハモンド派とクラパム派との見解が対立し、いまだに一致を見るにいたらないことは、よく知られるとおりである。

動史上余りにも有名なかの一八一九年八月一六日の出来事を、そのなどが、それである。前者は、その題名のとおり、イギリス労働運出の多くの研究者によって真摯な努力がつづけられている。イギリスにおいても、最近の『ニュー・スティツマン』のブック・レヴュー欄は、相ついで、産業革命期の労働運動に関する研究を取り上げスにおいても、最近の『ニュー・スティツマン』のブック・レヴュ国の多くの研究者によって真摯な努力がつづけられている。イギリ国の多くの研究者によって真摯な努力がつづけられている。イギリ国の多くの研究者によって真摯な努力がつづけられている。イギリ国の多くの研究者によって真摯な努力がつづけられている。イギリ国の多くの研究者によって真摯な努力がつづけられている。イギリ国の多くの研究者によって真摯な努力がつづけられている。イギリスにおいて、

背景に力点をおきつつ、明らかにするため、尨大な資料を駆使した背景に力点をおきつつ、明らかにするため、尨大な資料を駆使した背景に力点をおきつつ、明らかにするため、尨大な資料を駆使したする。

=

さて、右のリードやショイエンの研究が、ともに、特定の事件あらて、右のリードやショイエンの研究が、ともに、特定の事件は、ラッンス革命前後からチャーティスト運動の没落にいたるまでの、フランス革命前後からチャーティスト運動の没落にいたるまでの、さて、右のリードやショイエンの研究が、ともに、特定の事件ある。

り、この点にも、本書のために著者の払った並々ならぬ努力の程をおされ、さらに、E・J・ホブスボームその他の最近の諸研究にいもちろん、差しあたりわが国において入手可能な原資料も丹念に検じめとして、ウェッブ夫妻やG・D・H・コールらの古典的研究は、まず、本書の第一の特徴と考えられるのは、F・エンゲルスをは

部及び紹介